

正倉院に伝わる天蓋の骨

西川 明彦

はじめに

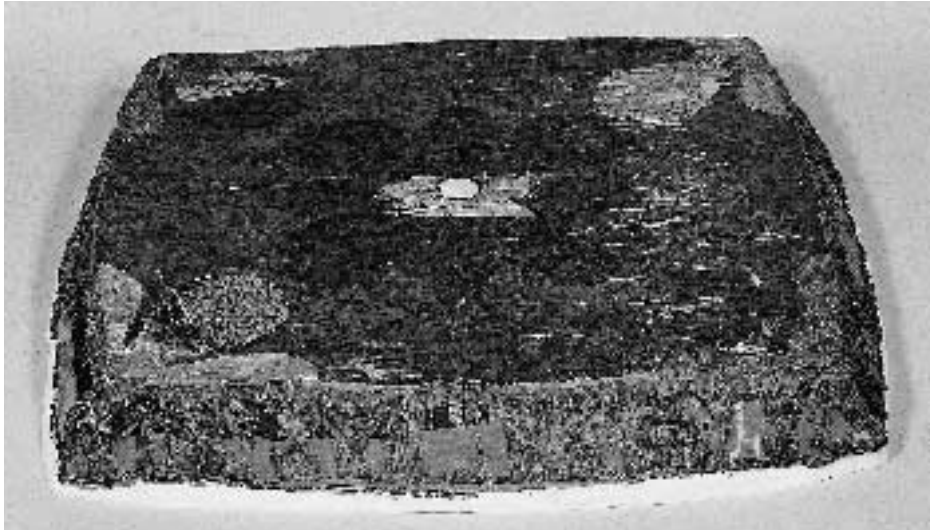
天蓋は本来インドにおいて炎暑を避けるために貴人にさしかけていた傘で、それが転じて仏像の頭上に掛ける荘厳具として用いたり、法会の際に僧侶にかざしたりするようになったとされる。形状は方形、六角形、八角形、そして華形などがあり、木製や金属製など様々な材質のものがある。古い遺品はそれほど多くはないが、磚仏や押出仏、絵画資料に古制を窺うことができる。

正倉院には錦や綾などで作った方形あるいは八角形の天蓋が、残欠部分を含めると、およそ十四張分伝わる。細かな構造は異なるが、おおむね屋蓋部は軒周りが垂れ下がり、その下辺には舌状あるいは襷を寄せた垂飾を巡らせている（挿図1）。

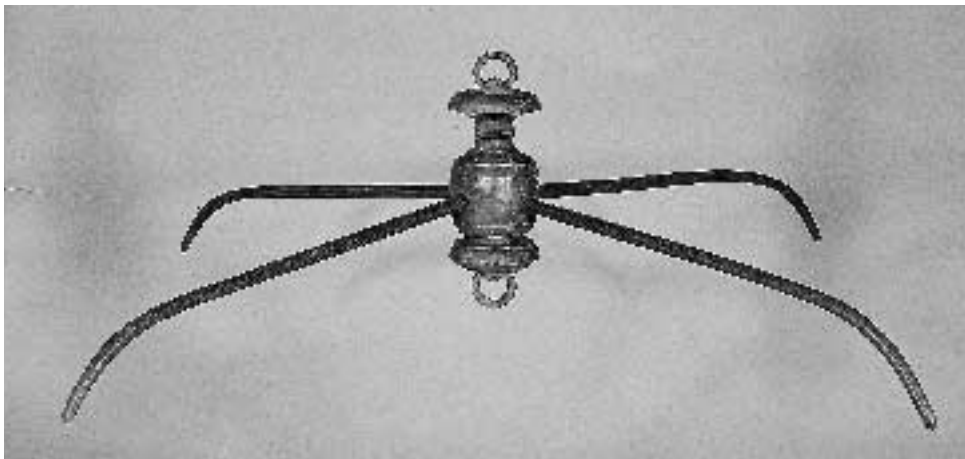
そして、それらとの対応関係は不明ながら、灌上天蓋骨および天蓋骨（いずれも中倉一九六）と呼ばれる、布帛製の屋蓋部分を内側から支える

木製の骨が二十一点遺されている（挿図2）。

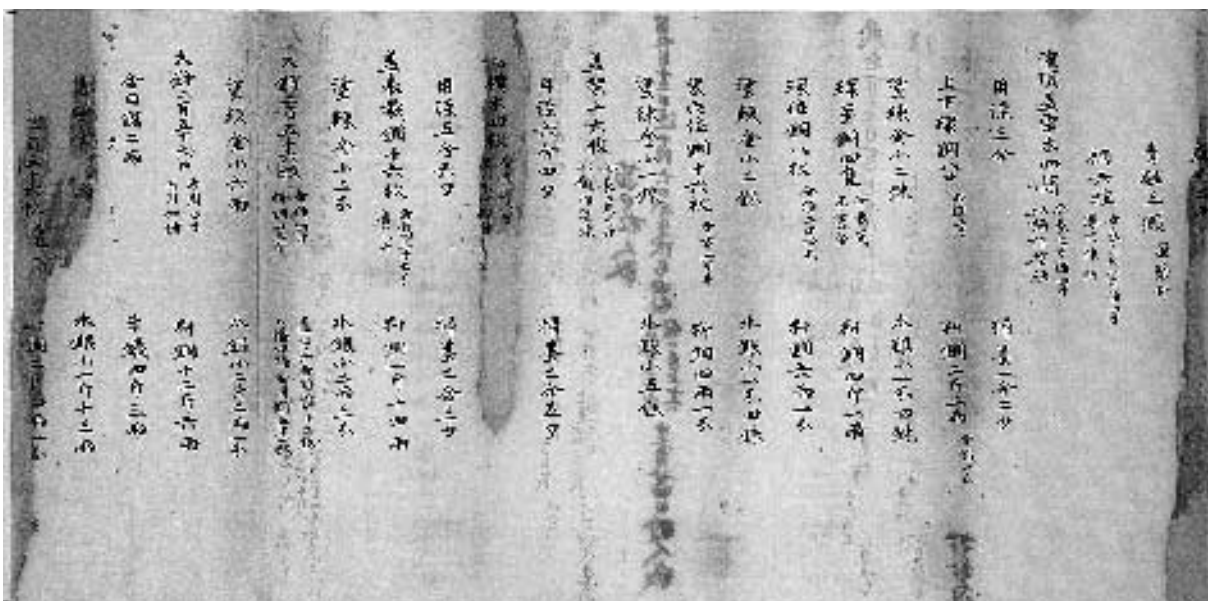
これらの天蓋の骨（特に記さない場合は灌上天蓋骨をも含めた総称として用いる）については、昭和六十一年の正倉院展に天蓋骨第一〇号（中倉一九六）が、そして平成三年の正倉院展には、灌頂天蓋骨第二号（中倉一九六）が出陳され、それぞれ、概説と写真が『正倉院展目録』に掲載されている。その後、『正倉院年報』第十六号（正倉院事務所 平成六年）に天蓋骨第一号（中倉一九六）の調査報告があり、『正倉院宝物6 中倉Ⅲ』（毎日新聞社 平成八年）に二十一点全部の側面写真およびそれらの寸法、材質、墨書銘と概説が掲載された。しかし、上下からの部分写真やX線透過写真などについては公表する機会が得られず、構造については一般的にあまりよく知られていない。そこで本稿は出来る限り正倉院の天蓋の骨についてのデータを公表するとともに、史料と対照し、若干の考察を加えるものである。



挿図1 南倉182 方形天蓋 第1号



挿図2 中倉196 灌頂天蓋骨 第2号



挿図3 造仏所作物帳断簡（奈良国立博物館蔵）

一、史料に見える天蓋の骨の部分名称

天平六年の「造仏所作物帳断簡（以下作物帳断簡）」（奈良国立博物館蔵、挿図3）は灌頂天蓋四具の用材が記されており、当時の天蓋の骨の部分名称を知ることができる。そして、そこから読み取れる構造は、今回報告する正倉院の天蓋の骨にも見え、奈良時代における天蓋の骨の典型を示すものである。

もちろん、史料によつてはこの断簡に記載された部分名称とは違う名称で表記されているものもある。しかし、これほど細部にわたった記載は他に見えないので、本稿では、はじめにこの作物帳断簡に記載されている天蓋の骨の部分名称について考証してみたい。

ところで、灌頂天蓋と天蓋の区別であるが、一般的に幡を垂下するものが灌頂天蓋、幡の付属しない笠のみのものが天蓋と考えられている。⁽²⁾このことは、多くの奈良時代の史料において、通常は幡を一旒、二旒…、あるいは一首、二首…などと数えるのに対し、灌頂幡（灌頂天蓋に同じ）と記されているものは一具、二具…と数えることや、⁽³⁾正倉院に伝わる幡に天蓋を頂いたことを示す「灌頂幡蓋」といった銘記があること、⁽⁴⁾それと古代の天蓋が付属する幡として知られる法隆寺献納宝物の金銅製「灌頂幡」が『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に「金泥銅灌頂吉具」と記されていることなどを根拠としている。

したがって、天蓋の骨に付く環（環）のうち、上方の環は天蓋本体を吊

するためのもので、灌頂天蓋骨と天蓋骨の双方ともに付くが、下方にも環を有するものは、幡を垂下する灌頂天蓋骨のみと考えられる。それらを踏まえて、作物帳断簡を見てみると、記載されている灌頂天蓋骨は上下に環を有し、幡が付属していたことが読み取れる。

なお、現存する造仏所作物帳を通覧しても、幡や屋蓋の材質に関する記載は見当たらない。しかし、後述するように、屋蓋や幡には大小の鋪（つばがね）と呼ばれる、鈴を飾るための座金を取り付けられている。そして、その鋪の取り付けについてはこの断簡の直後に「鋪鈴等固銅系一百八縷々別長三尺（中略）黄糸六両鋪固料」⁽²⁴⁾三三「大日本古文書」二十四の三三頁の意、以下同）とあり、針金ではなく、黄糸を用いており、屋蓋および幡ともに布帛製であつたものと思われる。⁽⁵⁾

以下、断簡を部分ごとに細かく検討し、そこに記されている灌頂天蓋の全体像を捉えてみようと思う。なお、文中の寸法や重さは一尺を二九・六センチ、一斤を六七〇グラムで換算している。⁽⁶⁾

（一）宗木（灌頂蓋宗木）

灌頂蓋宗木四箇 各長七寸径四寸
以楠作塗漆

用漆三合 掃墨一合二タ

宗木（むなぎ）は天蓋の骨の軸部のことで、現在は一般的に天蓋の「軸」と呼ぶ。また、車輪の中央の「輻」が集まる箇所「轂」⁽⁷⁾に似ることから「轂」を当てることもある。

作物帳断簡の記述からは形状までは分らないが、長さ二〇センチ強、

径約一二センチと、寸法表記が長さで径で記されていることから、円筒形もしくはそれを轆轤挽きしたような形状であることが想像できる。

楠製で、漆に掃墨を混ぜた黒漆塗り仕上げを施す。楠は緻密で工作しやすい材で、樟脳を含むため防虫性があり、七世紀の仏像彫刻に多用されている。

なお、天平宝字四年の造金堂所解に灌頂天蓋骨に関する記載があり、そこに見える「一両灌頂二具料笠根目塞十二枚料別二朱」(16二六四)や、「一升六合灌頂笠根二具土漆黒漆花漆料」(16二六九)からすると、「笠根」の語もこの宗木と同じ部位を指す可能性が考えられる。

本来「宗木」は建築用語で、今日の「棟木」のことで、薨(大棟)に取り付けた材とされる。⁽⁷⁾

(二) 環(環銅)

上下環銅八口各径二寸 料銅二斤一両合銀一分

塗練金小二銖 水銀小一分四銖

環銅(みみがね)は天蓋自体を吊すため、また、宗木の下に幡を垂下するため、宗木の上下に取り付けられていた径六センチ程の銅製鍍金の輪。この環は次に述べる環莖と別に記されていることから、可動式の遊環であったものと思われる。

銅の地金には極めて微量の銀を混入している。銅に銀を混ぜると地金が硬くなるが、この場合、銅がおよそ三八〇グラムに対して銀一〇グラムと一パーセントにも満たない混合比であり、その効果には疑問がある。一

般的に奈良時代の銅は精錬しきれずに銀が若干量残留しているが、あるいはそこにこのわずかな量の銀を混入することで、何らかの効果があつたのかもしれない。現にこの断簡に接続する部分に記載されている同様の銅製金具には一〜二パーセント程の比率で銀が混入されているものがいくつか見られる。環には相当な重量がかかることや、遊環であることから強度が要求されたためであろうか。あるいは、正倉院の天蓋の骨を見ると、環を開いた状態で後述の環莖の取り付けを行い、その取り付け後に環を閉じるような構造のものがあるが、作物帳断簡の記載品も同様の構造で、曲げ伸ばし作業に適した地金とするために銀を混入する必要があつたのかも知れない。

前記の造金堂所解のうち「灌頂上下緒付金四勾」(16二六四)はこの環を指し、やはり宗木の上と下に取り付けられていたことが分かる。

(三) 環莖(環莖銅)

環莖銅四隻各長一尺
不塗金 料銅四斤一両

環莖銅(かんのなかごがね)は長さのみの表記であることと、「不塗金」とし、他の金具に見られる「塗練金」「水銀」などの水銀アマルガムによる鍍金料が記載されていないことから、鍍金を必要としない、つまり表から見えない棒状のものであることが分かる。おそらく宗木を貫いて、両端に環を付す銅製の軸棒を指すものと考えられる。

長さ一尺と宗木の長さ七寸よりも長いのは、この環莖の端をかしめて環を取り付ける分を見込んでいるためと思われる。用いる銅の量は約六八〇

グラムと、他の金具に比して一隻あたりの使用量が最も多く、太さの記載はないが、かなり太いものであったと思われる。ちなみに、正倉院の天蓋の骨には同じような軸棒を有するものがいくつかあるが、いずれも鍍金がない。

なお、造金堂所解に「中莖上下端」(16二六四)という記述が見えるが、この語は次に述べる「環位銅」と同じ部分を指し、「中莖」がこの「環莖」を指すものと思われる。おそらく「莖」も「中莖」も「なかご」と読み、ものの内部の中心を意味するもので、現在では刀身の柄に収まる部分、鍍金の箇に収まる部分、中空の鋳物の空洞部分の型など様々な用例がある。

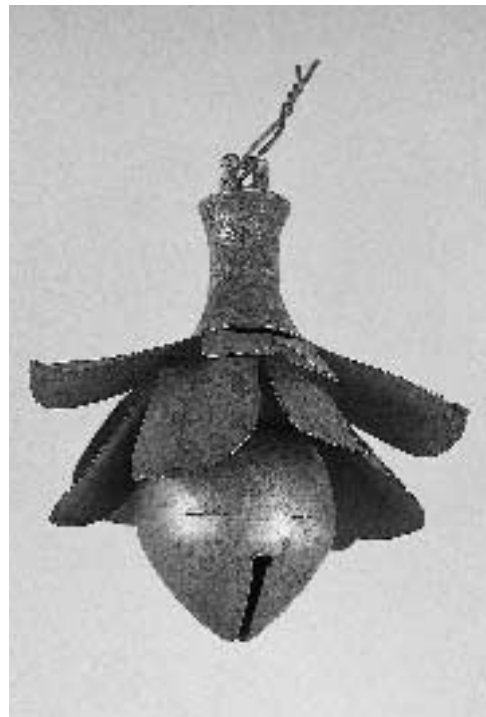
(四) 環位(環位銅)

環位銅八枚各径二寸四分 料銅六兩一分

塗練金小二銖 水銀小一分四銖

環位銅(かんのくらいがね)は宗木の上下小口に取り付けられた銅製鍍金の金具。直径七センチほどの円形もしくは花形の平金具であったと思われる。

今日この部位を指す場合には「環座」となるであろうし、また、奈良時代の史料においても、ここに相当するような部位には一般的に「座」の語を用いている。しかし、この「位」の文字を用いる例が全くないわけではない。たとえば、この史料と一連の部分に「鏡位花形」(1五七五)や「鈴位花形」(24三三)などが見え、また『延喜式』神祇式伊勢太神宮に「位金」という花形や円形の金具に関する語も記されている。ただし、「位金」は座



挿図4 中倉195 鈴鐸類 第9号 花形鈴

金のようなものであるが、「鈴位花形」は立体的な花弁形で、正倉院に伝わる鈴鐸類第九号花形鈴(中倉一九五)(挿図4)の萼部分のようなものかも知れない。

(五) 架六位(架六位銅)

架六位銅十六枚各方一寸半 料銅四兩一分

塗練金小二銖 水銀小五銖

架六位銅(はえぎのあなのくらいがね)は後述の「架」を差し込むために穿たれた「架穴」の周囲を補強かつ装飾するために取り付けられた、銅製鍍金の金具。一辺四・五センチ程の正方形の薄板で、前記の環位銅と同様、「位」の語を用いる。

宗木四箇に対して架六位銅が十六枚あり、次に述べる「架」も十六本と

あることから、この天蓋が方形であつたことが分かる。

先掲の如く、造金堂所解に「一兩灌頂二具料笠根目塞十二枚料別二朱」

(16)二六四)という記述があり、「笠根目塞」が同じ部分を指す可能性が考えられる。その場合、灌頂二具につき笠根目塞十二枚ということは天蓋は六角形ということになる。なお、目塞(まふたぎ)は鞆の蓋や、刀の目釘孔の飾り金具など、穴を塞いだり、穴の周りを飾る金具というような意味があるらしい。

(六) 架(蓋架)

蓋架十六枚 各長二尺七寸
以欄作塗漆

用漆六合四夕 掃墨二合五夕

架(はえぎ)は宗木に差す腕木のことで、この文面から形状は分からない。おそらく布帛製の屋蓋を上から掛けたと考えられるが、布帛製といえども架にはかなりの重量がかかる。その意味からすると「欄」すなわちケヤキは曲げ強度が高い材であり、架には適材といえる。仕上げは宗木と同様に黒漆塗りとしている。

架の長さを二倍し、さらに宗木の径を加えると、およそその対角の長さは一七〇センチ程となる。したがって、布帛製の屋蓋は一辺の長さが約一二〇センチの大きさの方形であつたと考えられる。

なお、正倉院に伝わる天平勝宝九歳五月二日の年記のある灌頂街木袋(南倉一四四ほか)に「灌頂街木」という墨書が記されており、これを天蓋関係のものとする説がある。⁽⁹⁾ 宗木に架を付けた状態を街(町)形木枠と

称したものと思われるが、あるいは次に述べる横木を街形に組んだものかも知れない。

なお、「架」は奈良時代の建築用語に見え、垂木を指したとされる。⁽¹⁰⁾

(七) 幡横木

幡横木四枚 各長五尺四寸
厚八分以欄作塗漆

用漆五合六夕 掃墨二合三夕

幡横木(ばんのよこぎ)は寸法表記の一部が欠失しているため幅は分からないが、およそ一六〇センチ程の長さで、厚さ約二・四センチの櫟製の板である。具体的に天蓋骨とどのように構造的な関連があるのかは分からない。しかし、この後に見える「大鋪」の脚注に「蓋四具各用鋪十二枚大幡四條各用鋪五十二枚」とあり、また、この直後に接続する部分に「小鋪」という記載があり、その脚注に「小幡八條各用鋪卅六枚」(24三三)とあることから、あるいは宗木の下方の環にこの横木を取り付けて、横木中央に大幡一條と左右に小幡一條ずつを取り付けていたという推測は可能かもしれない。

(八) 蓋表裁銅

蓋表裁銅十六枚 各高三寸七分
廣八寸

料銅一斤十四両

塗練金小二分 水銀小二両三分

裁銅(きりがね)は銅製鍍金で高さ約十一センチ、広さ約二十四センチの透彫金具を意味する。「蓋表」が具体的にどの部分を指すのかは不明であ

る。しかし、寸法が高さと広さで表されているのは、この裁銅を縦方向に使用していた可能性を示唆するもので、あるいは布帛製の屋蓋の軒周りに取り付けられたのかもしれない。

(九) 大鋪

大鋪二百五十六枚 各径四寸 蓋四具各用鋪十二枚
料銅廿三斤 大幡四條各用鋪五十二枚

塗練金小六両 水銀小二斤二両一分

大鋪(おおしき)は直径約十二センチの銅製鍍金の平金具で、この章のはじめに述べたように黄糸で布帛製の屋蓋に十二枚を、大幡に五十二枚を取り付けたものと思われる。

(十) 大鈴

大鈴二百五十六口 各周四寸 所用如鋪 料銅十二斤六両

合白鑄二両 子鐵四斤三両

塗練金小五両 水銀小一斤十三両

直径約十二センチの大型の鈴で、この直後に環位銅の項で触れた「鈴位花形」(24三三)が記されており、おそらくこの鈴に花形の萼状金具が付いたものと思われる。そして前記の大鋪に銅製の針金で取り付けたのである。

以上がこの断簡に記載されている部分で、天蓋の骨自体の記述は架までである。しかし、文中でも触れているが、この史料はこの後もある程度復

原されており、灌頂天蓋の全体像をうかがう上で参考となるので、少々長くなるが関係箇所(の)の釈文を末尾(二六頁)に抜粋しておく。なお、そこに見える「幡鎖」や「鎖毛」(24三三)までは灌頂天蓋と一具の幡に係するものと思われるが、それに続く「幢末横木」(24三四)については、灌頂天蓋と具体的にどのような関連があるのかは分からない。

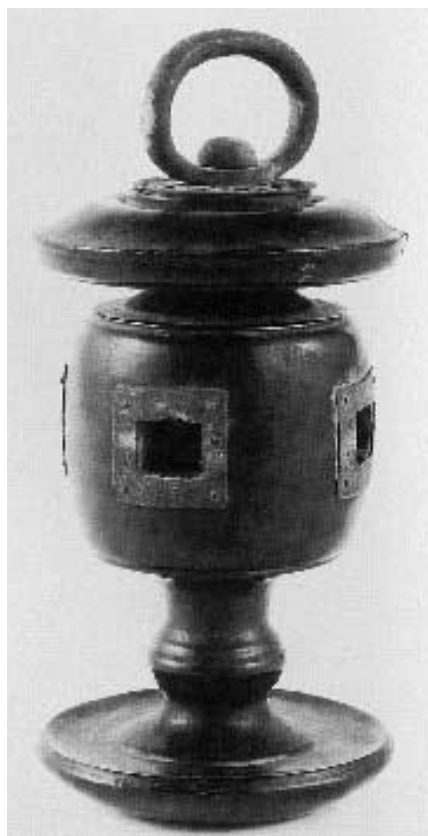
二、正倉院の天蓋の骨の材質と構造

個々の材質や寸法などのデータは後の図版キャプションに掲載することとし、ここでは前章で見てきた部分名称に沿って正倉院の天蓋の骨について概要を眺めてみたい。

(一) 宗木

いずれも細かな違いはあるが、亜字形花瓶に似た形姿で、膨らんだ胴部の上下に大きくくびれを持たせて、茸の笠状の頭部と脚部を轆轤挽きして作り出す。おおむね櫓を用いており、ほかに桑、檜、桜が各一つずつある。いずれも樹種判定は肉眼観察によるが、櫓と桑は環孔材で作物帳断簡に見える散孔材の楠とは異なる⁽¹⁾。

用材にきまりはなかったようで、たとえば天平宝字六年の造金堂所用錢雑物帳には「卅五文自水沼山運灌頂二具料槐駄一匹賃」(16二八八)とあり、槐が灌頂天蓋の料として記載されている。しかし、どのような材でも良かったというわけではなく、作物帳断簡を見ても、部位によって樹種を使い



挿図5 天蓋軸部（莊162、法隆寺蔵）

分けていることは明らかである。宗木については重量を支え得る強度はもちろんのこと、轆轤挽き加工が可能な材であることが重要な決め手となる。宝物および史料に見える広葉樹類はいずれも緻密かつ強靱な材で、また唯一針葉樹の檜を含め、轆轤挽き、および環莖や架を差すための穴を穿つことが可能で、宗木には適していると言える。

表面仕上げは白色塗り、赤漆、素木のものもあるが、ほとんどは作物帳断簡に見えるのと同じような黒漆塗り仕上げである。

ところで、宗木の上下方向については、灌頂天蓋骨はさておき、片側のみに環を付す天蓋骨の場合は明らかで、環の付く側、つまり宗木の笠状部分の外面が緩やかな曲面を呈する方が上側で、笠状部分の側面に稜を持つ方が下側であることが分かる。また、そのようにした場合、架穴の傾斜角が宗木の中心に向かって下がる傾向が見られ、構造的にも架が脱落し難くなり、理にかなう。なお、蛇足ながら天蓋骨第一号（中倉一九六）には宗

木を天井から吊すためと思われる太紐が、環に付いたままの状態で伝わっており、宗木の上下方向を明らかにする（二三頁）。このように宗木の上下方向を定めた場合、胴の上方のくびれが、下方のくびれより長くなり、均衡のとれた造形となる。ただし、灌頂天蓋骨の宗木に関しては上下どちらの方向でも使用可能といえる。しかし、天蓋骨と同様の上下方向にした場合に架穴の傾斜角も上述のような傾向が見られ、おそらく天蓋骨と同様であつたものと思われる。

このように見ていくと、平成四年に法隆寺の資財調査で発見された天蓋の宗木は、正倉院のものからすると上下が反転していることになる（挿図5）。法隆寺は古代から近世に至る各時代の天蓋の骨を数多く伝えているが、当該のものは、環位金の文様から白鳳期の人天蓋に比定されているものである。現状において環が付いている側を上方向とする吊下げ式の人天蓋と考えられているが、本来は下端にも環が付いていたとされる⁽¹²⁾。もしそうであるなら、この宗木は現在の解釈とは異なり、灌頂天蓋のもので、正倉院のものと上下方向が同じであつたものと思われる。ほぼ同形態の宗木が数十年ほどで上下反転したとは考えにくく、また現状のままでは脚部が垂れ下がり、造形的にバランスが悪いように思える。ちなみに、先に述べた天蓋骨第一号（中倉一九六）の環位金の透かし彫り文様は、天平期に流行した対葉花文から成る宝相華文の中心に連珠円文を組み合わせたもので（二三頁右上図）、正倉院の天蓋の骨の中でも若干時代が古いものと思われるが、やはり宗木は前に述べたとおりの上下方向を示している⁽¹³⁾。

(二) 環

灌頂天蓋骨第一号(中倉一九六)のみ頂を尖らせた宝珠形である以外は(一二頁)、おおむね円環である。

構造的には大きく二つの形式に分けられる。一つは環自体の基部に座を有し、その座に穿たれた孔に環莖を通して止める形式である。この形式の環は環頂部に合わせ目を持ち、環莖に頭を有す場合でも、かしめる場合でも、環を開いた状態で施工し、後で環を閉じている。なお、この形式の環は環莖を中心軸にして三六〇度回転する。

もう一つは次の環莖の項で詳述するが、環と環莖が一体式のもので、これは遊環ではなく固定式となる。

なお、灌頂天蓋骨第五号(中倉一九六)のみ他と形式が異なり、環莖に小さな環があり、そこに大きな環を通すような遊環形式となる(一六頁)。また、灌頂天蓋骨の場合、遊環式と固定式の二つの形式の環を併用するものもある。

(三) 環莖

上部にのみ環を有する天蓋骨、上下に環を有する灌頂天蓋骨、双方とも環莖を宗木に貫通させて環を取り付けると、釘脚を有する壺金状の環を宗木に打ち付けるものがある。上部の環を取り付けるだけの天蓋骨の場合でも、かなりの太さの環莖を宗木に完全に貫通させて下端でかしめているものがある。そうかといって小型の宗木はおおむね打ち付け式によるが、大型の宗木が必ずしも環莖を貫通させるとは限らないようである。

なお、前章末でふれた幢末横木に関する記述に「端環」と「打立環」という語が見える。ともに寸法表記に「莖長」とあることから、環に釘脚状のものが付いた壺金状の金具のことと思われる。ちなみに壺金を当時、打立(うちたて)と呼んでいたようで、戸に打つ「鑢打立」と記されたり、番と一具で記載されたりしている。あるいは端環は環が可動式で釘状の脚が付く前記灌頂天蓋骨第五号(中倉一九六)の環のようなものを指し(一六頁)、打立環と区別しているのかもしれない。そのことと関係するのかどうかわからないが、作物帳断簡によると、端環には銅地金に銀を混ぜるが、打立には銀を混ぜなかったようである。

(四) 環位金

灌頂天蓋骨第二号と第七号(中倉一九六)が鉄製である以外は(一三、一七頁)、いずれも銅製鍍金で、円形、六稜花形、六花形、八稜花形、八花形を呈す。多くは無紋であるが、灌頂天蓋骨第四号・一・二と天蓋骨第二号(中倉一九六)には毛彫りで花文を表し(一五、一四頁)、天蓋骨第一号(中倉一九六)には透かし彫りが施されている(二三頁)。

環位金と宗木の取り付けは鉾釘を打つ場合もあるが、鉾釘を打たずに環莖を打つことで止め付けているものもある。なお、灌頂天蓋骨第六号(中倉一九六)には環位金が付かない(一七頁)。

(五) 架六位金

架六位金が付くものは二十一点のうち九点ある。架六はいずれも四角形

で、架穴位金も方形を呈する。材質は銅製鍍金の薄い板で、灌頂天蓋骨第四号・一・二（中倉一九六）は毛彫りで飾り（一五頁）、さらに天蓋骨第一号（中倉一九六）は透かし彫りを施すが（二三頁）、それ以外は無紋である。それぞれ四本ないし六本の鉚釘を打って宗木へ取り付け

（六）架
いずれも先端はへの字型に屈曲し、断面はおおむね円形で、宗木の架穴に差し込む柄は断面方形である。材は不明なものがあるが、大半はケヤキと思われる。一木を削って作ったもので、X線透過写真によると、先端を曲げて成形しているものがいくつか確認



挿図6 中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其2 架（X線透過写真）

できる（挿図6）。作物帳断簡を考証した際に、架にケヤキを用いた理由として屋蓋の重量を支え得る材である点を挙げたが、このような曲げ加工が可能なのも理由の一つとして考えられる。

正倉院に伝わる布帛製の屋蓋部分を見ると、四隅には錦や革を袋状に縫って作った乳が綴じ付けられている。架の先端はこのような乳に差し入れて屋蓋を張ったものと思われる。

なお、灌頂天蓋骨第一号（中倉一九六）の架は四本しか残らないが、架穴は六孔穿たれており、屋蓋が六角形であったことが分かる（二三頁）。それ以外はいずれも四孔で、方形の天蓋と考えられる。

むすびにかえて

天蓋骨の部分名称については本文中で述べたように、史料によって異なり、とくに決まった用語はなかったのかもしれない。しかし、造仏所作物帳をはじめとする奈良時代の史料を考証し、宝物と対照することにより灌頂天蓋骨には上下に環が付き、幡を垂下していたことを改めて確認することができた。また、灌頂天蓋には作物帳断簡に見られるようにかなり大型で、大幡と小幡をいくつかけ垂下するものや、灌頂天蓋骨第九号（中倉一九六）のように「小灌頂」と記される小型のものがあつたようである（一九六頁）。そして、「灌頂」の語自体に天蓋を付属する幡を意味する場合があつたと思われるに至った。

本文中述べたように、法隆寺は古代から近世に至る各時代の天蓋の骨を

数多く伝え、形状や材質にもさまざまなものがある。今後はそれら正倉院以外の天蓋を含め、宗木の形状や金具の文様などを合わせて考えることで、その形式的な変遷をたどることができるのではないかと考えている。また、それに関連して、正倉院宝物中の布帛製の屋蓋部分と対照し、その染織意匠と対比する必要性を感じている。

注

(1) 正倉院にはこの他に、人にさしかける人天蓋に属し、他の二十一点とは形式が異なる天蓋骨残欠(中倉一九七)が一点遺る。人天蓋には、高松塚古墳壁画の男子群像に表されているような傘蓋と、堂内荘嚴用の吊り天蓋と同じ形式のものとの二系統があるが、本品は前者に該当するものと思われる。傘蓋の場合、史料にも吊り天蓋形式のものとは別に扱われており、対照しても煩瑣になるだけなので、本稿では省く。

(2) 正倉院の天蓋骨と灌頂天蓋骨は、昭和十二年に分類整理が行われ、調査が作成された際に命名されたもので、その時点において灌頂天蓋と天蓋を識別していたと思われる。ただし、天蓋が付く幡のことを灌頂幡と明言し出したのは近年で、沢田むつ代「蜀江大幡(奈良・法隆寺蔵)」(『MUSEUM』五四四号 平成八年)や尾形充彦「正倉院の大幡」(『正倉院年報』第十八号 平成八年)などである。しかし、両者ともに灌頂幡を一旒、二旒…と数える例があることなどから、必ずしも天蓋が付属しない可能性も指摘している。

(3) 『日本書紀』推古天皇三十一年七月条、天平十九年勅録の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』および『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、神護景雲元年『阿弥陀悔過料資財帳』など。

(4) 大幡垂飾組帯(函一九)に「東大寺第七灌頂幡蓋 天平勝宝九歳五月二日」という墨書がある。

(5) 金銅製の鋪に取り付ける際に、目立たないように黄色の糸を用いたものと思われる。

(6) 松嶋順正「正倉院宝物より見た奈良時代の度量衡」(『正倉院よもやま話』学生社 一九八九)を参考にした。

(7) 福山敏男「正倉院文書に見える建築用語」(『正倉院年報』八、昭和六十年)

(8) 虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式 上』(集英社 平成十二年)二二五頁頭注及び一〇四三頁図二。

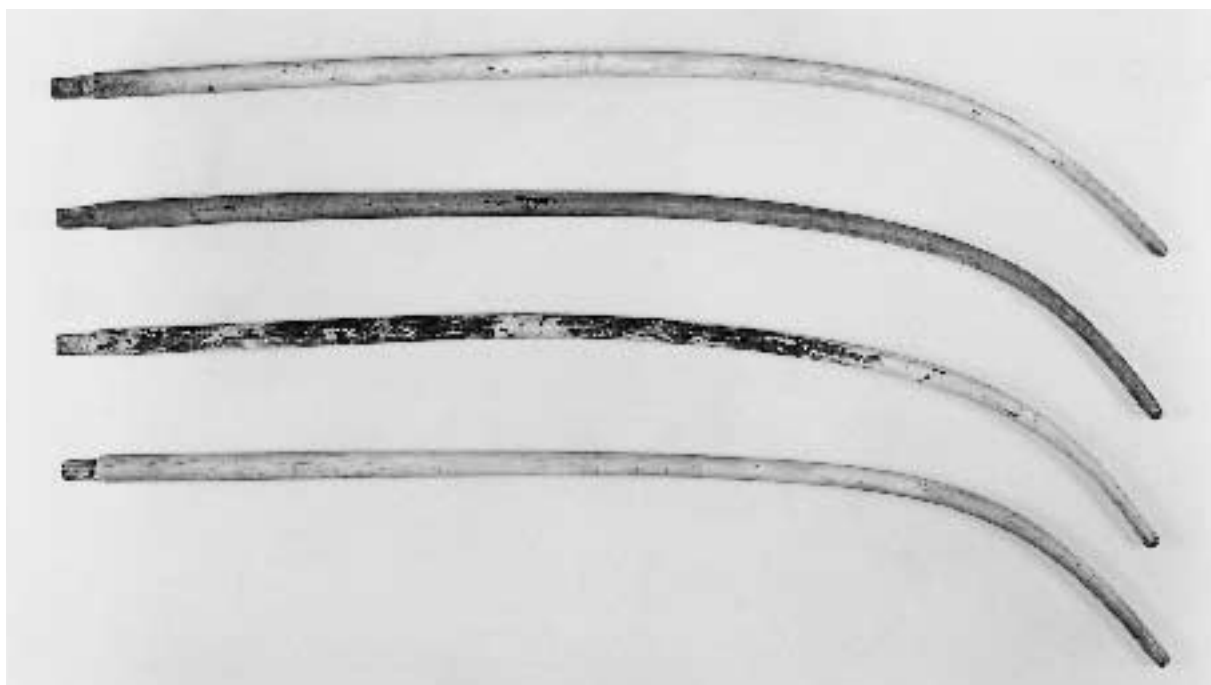
(9) 注2前掲尾形論文。

(10) 注7前掲福山論文。

(11) 金子啓明ほか「日本古代における木彫像の樹種と用材観―七・八世紀を中心に―」(『MUSEUM』第五五号 平成一〇年)において時期による用材観の変化について検討されているが、天蓋骨の用材にも関連するものかも知れない。

(12) 『聖徳太子一三八〇年御遠忌記念法隆寺展』図録の出品解説(阪田宗彦氏担当執筆 平成一三年)。

(13) 正倉院には、一般的な天平時代の綾より組織や文様が古様なものを用いた布帛製天蓋が存し、それと一具であった天蓋骨が残っている可能性がある。



凡例

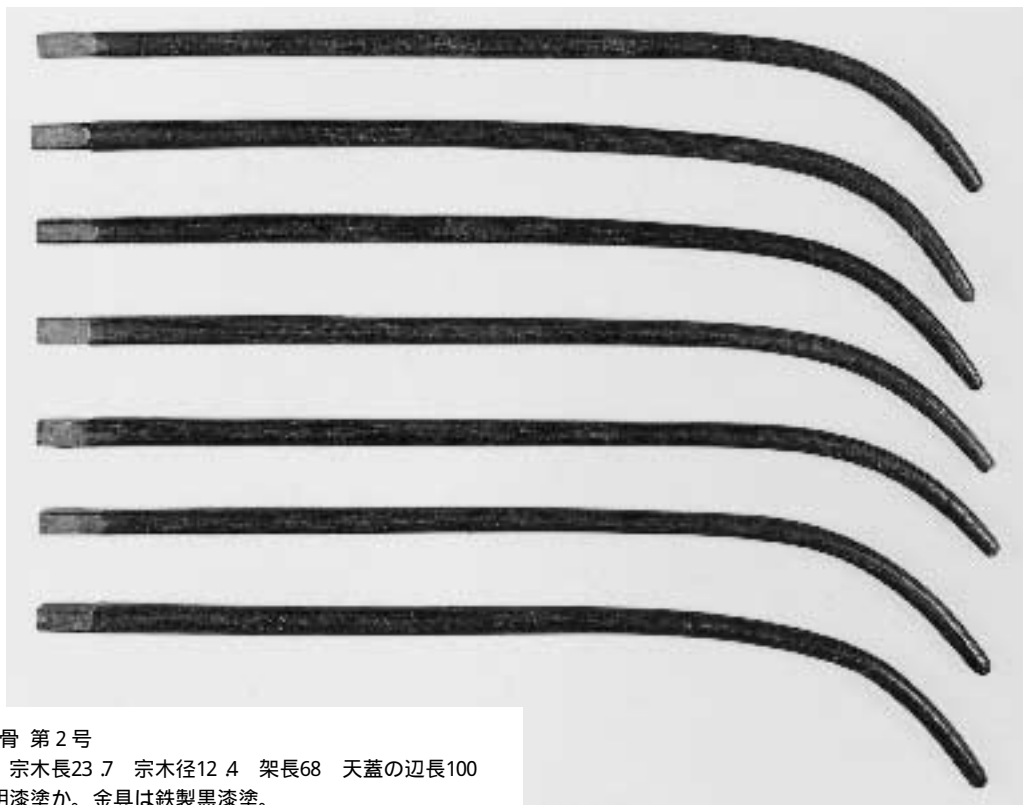
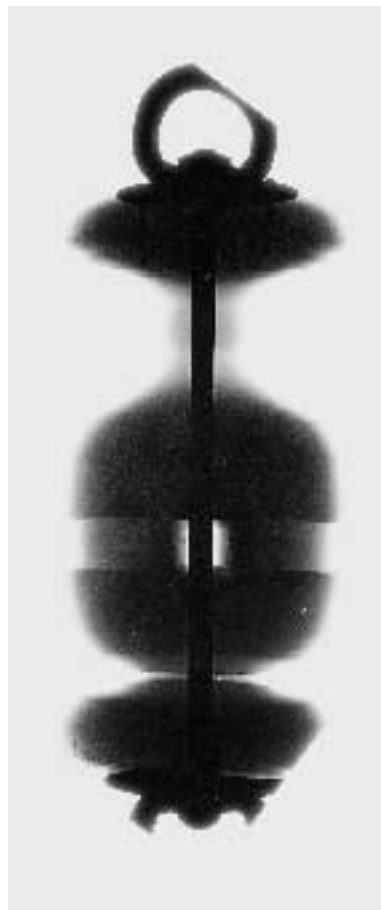
- 図版は宗木の上・下・側面写真と側面のX線透過写真、架が付属するものについてはその側面写真を載せる。ただし、X線透過写真については灌頂天蓋骨第4号其2は紙面の都合から、灌頂天蓋骨第5号は未撮影につき掲載していない。
- 寸法表記はいずれも最大値で、単位はcmで示す。なお、架の長さは弦長を示し、天蓋の径や一辺の長さについては架の長さと宗木の径からの推定値である。

中倉196 灌頂天蓋骨 第1号

[法量] 総高35.0 宗木長24.5 宗木径13.0 架長85
天蓋径170

[品質] 櫟製、白色彩色に油塗。金具は銅製鍍金。

天蓋の骨の個別データ

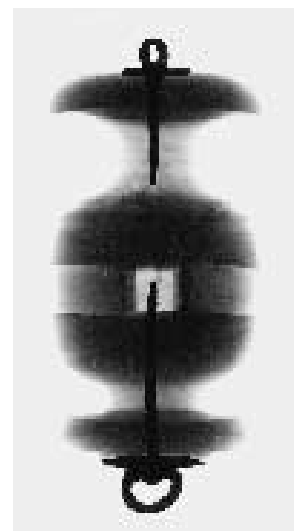


中倉196 灌頂天蓋骨 第2号

〔法量〕総高34.8 宗木長23.7 宗木径12.4 架長68 天蓋の辺長100

〔品質〕樺製、透明漆塗か。金具は鉄製黒漆塗。

〔銘記〕(宗木中央 墨書)「佐保」。(架穴 墨書)「五」「六」「七」「八」。
(架のうち5本 墨書)「一」「二」「四」「五」「八」。



中倉196 灌頂天蓋骨 第3号

[法量] 総高18.4 宗木長15.0 宗木径8.3 架長47
天蓋の辺長70

[品質] 桑製、架に蘇芳と墨で彩色。金具は銅製鍍金。

[銘記] (架穴 墨書)「乙」(架のうち3本 墨書)
「甲」「乙」「三」



中倉196 灌頂天蓋骨 第4号 架



中倉196 灌頂天蓋骨 第4号 其1

[法量] 総高37.4 宗木長25.8

宗木径13.8 架長106

天蓋の辺長154

[品質] 櫛製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。

[銘記] (宗木上面 刻文) 「一」

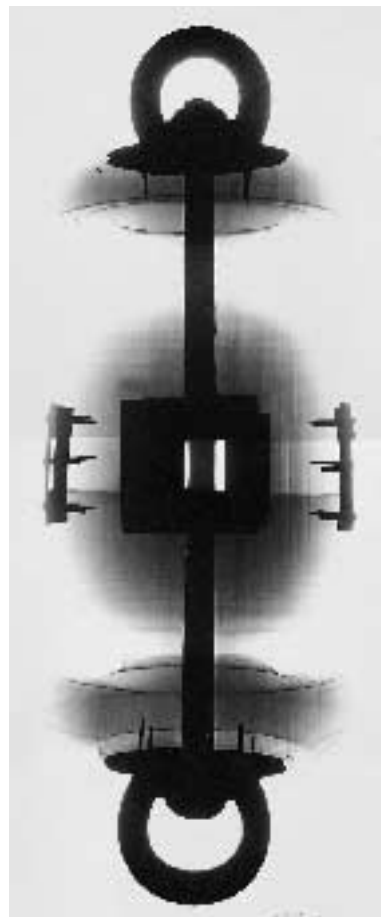
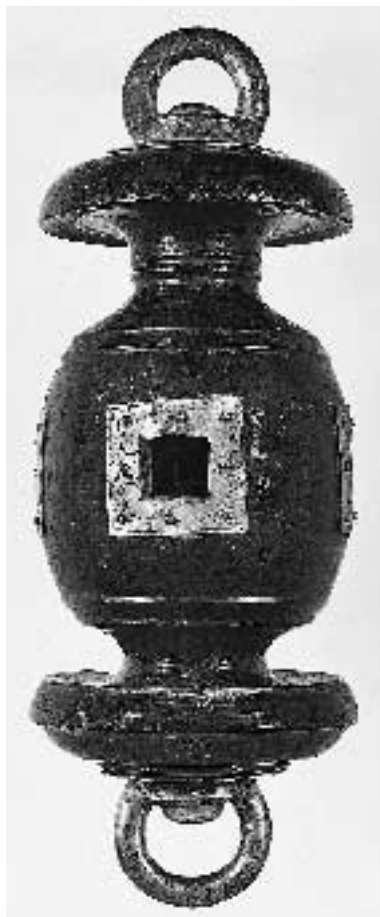
(架穴 刻文)

「|」「||」「|||」「||||」

(架のうち3本 刻文)

「一」「二」「四」

[備考] 架は完形4本と残欠3本が遺るが、其1・2との付属関係は不明。架の銘記は便宜上ここに記す。



中倉196 灌頂天蓋骨 第4号 其2

[法量] 総高37.3 宗木長25.2

宗木径13.7 架長106

天蓋の辺長154

[品質] 櫛製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。

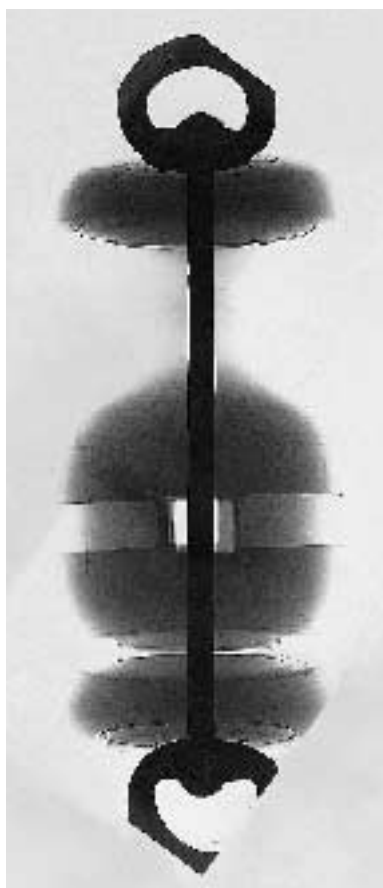
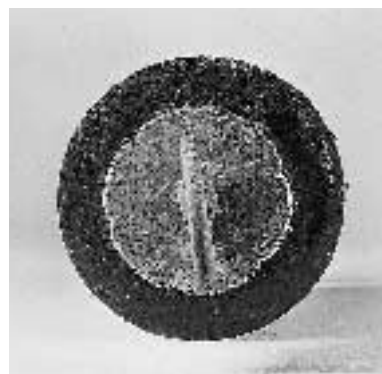
[銘記] (宗木上面とその裏 刻文) 「六」

(架穴位銅 刻文) 「|」「||」

「|||」「||||」

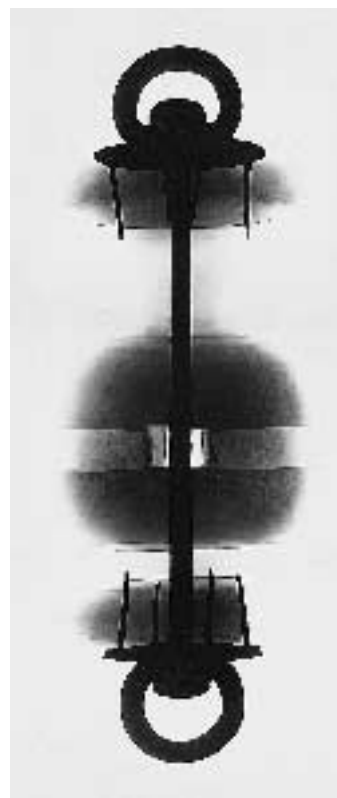
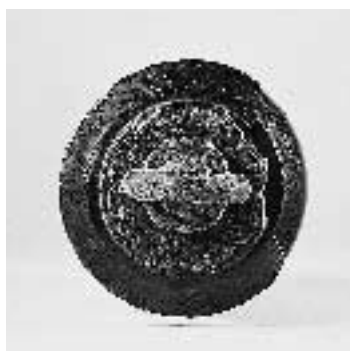


中倉196 灌頂天蓋骨 第5号
 [法量] 総高35 宗木長23 宗木径12
 [品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。
 [備考] 宗木の上下のくびれに各1孔あ
 るが、用途不明。宗木の胴に円
 味を持ち、下部の傘に稜を持た
 ず、鐶は壺金に遊鐶が付き、左
 右に倒れるもので他と型式が異
 なる。

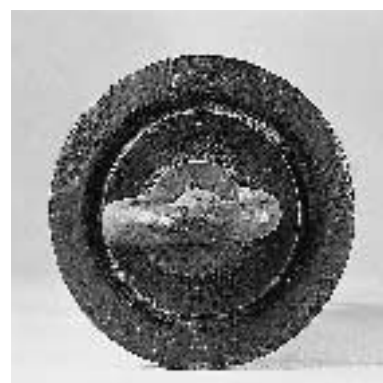
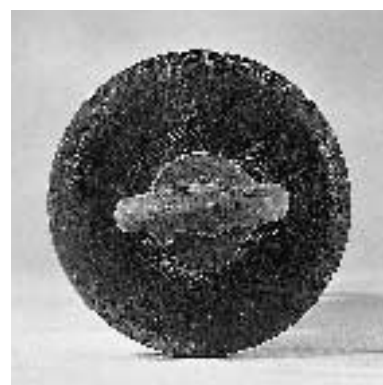


中倉196 灌頂天蓋骨 第6号
 [法量] 総高34.4 宗木長23.5
 宗木径12.1
 [品質] 桧製、黒漆塗。
 [銘記] (架穴 墨書)「十」と「一巳」
 「十」と「二巳」
 「十」と「三巳」 「十」と「四
 巳」

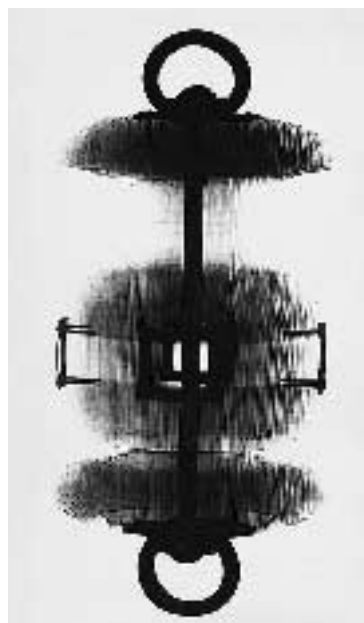
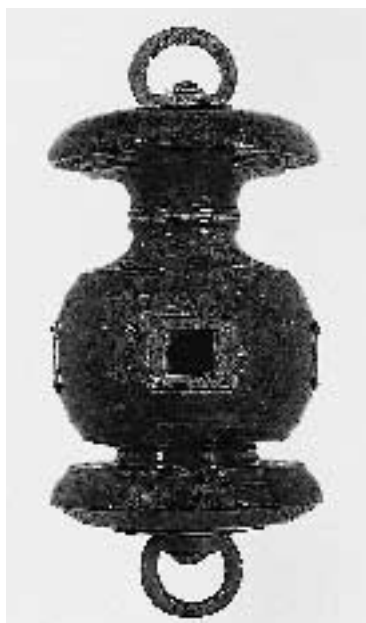
天蓋の骨の個別データ



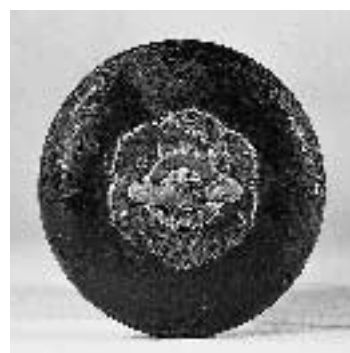
中倉196 灌頂天蓋骨 第7号
 [法量] 総高29 2 宗木長20 2 宗木径10 9
 [品質] 桜製、黒漆塗。金具は鉄製黒漆塗。



中倉196 灌頂天蓋骨 第6号 宗木上・下面



中倉196 灌頂天蓋骨 第8号 其1
 [法量] 総高22.0 宗木長15.4 宗木径10.3
 [品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。



中倉196 灌頂天蓋骨 第8号 其2
 [法量] 総高22 宗木長15.4 宗木径10.1
 [品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。
 [銘記] (上部環位銅 墨書)「大弁才天女」
 [備考] 天平6年経疏出納帳(三六五〇)に最勝王經一部、陀羅集
 經一部、絵櫃二合を五月一日を以って、大弁才天女壇に奉
 請したとある。灌頂天蓋骨第8号および第9号は銘記から、
 このころ造顕された大弁才天女像の荘嚴具と考えられてい
 る。(松嶋順正編『正倉院宝物銘文集成』83頁)

天蓋の骨の個別データ

中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其1

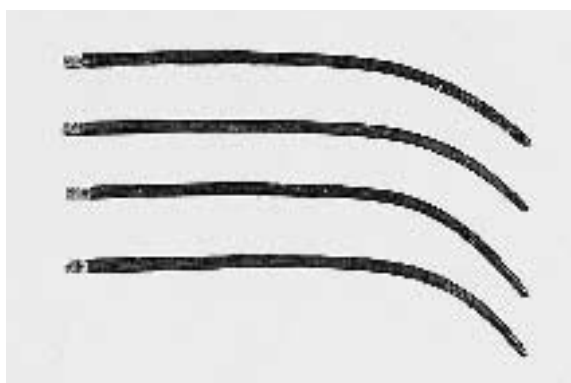
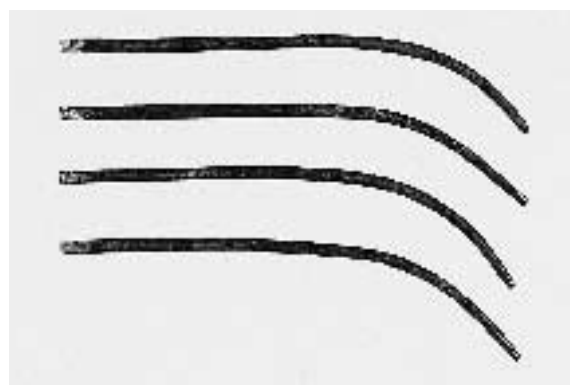
[法量] 総高16.1 宗木長12.1
宗木径7.5 架長33.5
天蓋の辺長49

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記] (架柄 墨書)「甲(小口)」
「大弁才/天女天/井四角/小灌頂(4側面)」
「甲(小口)」
「天/女/四/角(4側面)」
「甲(小口)」
「天/女/四/角(4側面)」

[備考] 第8号ないしは第9号に関連すると考えられる染織品断片数片の銘記をここに掲げる。

- 緋綾小灌頂断片(軸装93) 6片それぞれに墨書「大弁才天女天井四角小灌頂長一尺六寸五分 壇」
「□小灌頂方一尺六寸五分 壇」
「東大寺 天平勝宝六年五月三日」
「□(大)弁才天□」
「天平勝宝六年五月三日」
- 天蓋断片(南倉127号櫃)「東大寺 天平勝宝六年五月三日」
- 夾織羅幡残欠(南倉127号櫃)「大弁才天女堂幡長九尺 廣九寸 東大寺 天平勝宝六年五月三日」
- 幡垂脚残欠(玻璃装51)「大弁才天女壇幡長九尺 廣九寸 東大寺 天平勝宝六年五月三日」

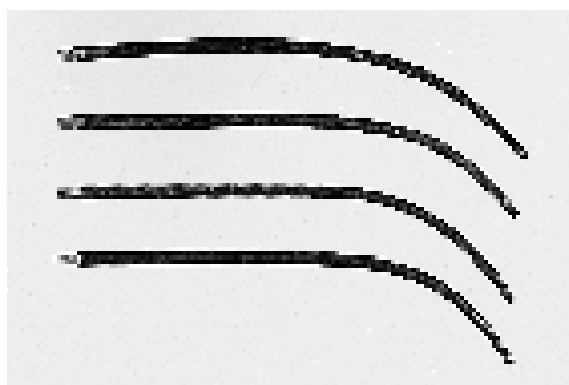


中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其2

[法量] 総高16.2 宗木長12.0 宗木径7.5 架長33.5
天蓋の辺長49

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記] (架柄 墨書)「大弁/才天/女/壇(4側面)」
「乙(小口)」
「大弁/才天/女/壇(3側面)」
「乙(小口)」
「大弁/才天/女/壇(4側面)」
「乙(小口)」
「大弁/才天/女/壇(4側面)」

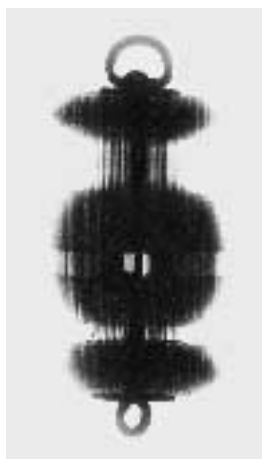


中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其3

[法量] 総高16.1 宗木長12.0 宗木径7.2 架長33.5
天蓋の辺長49

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記] (架柄 墨書)「大弁/才天/女壇(3側面)」_△「丁(小口)」_△「大弁才/天女天井/四角小/灌頂(4側面)」_△
「大弁/才天/女壇(3側面)」_△「大弁/才天/女壇(3側面)」



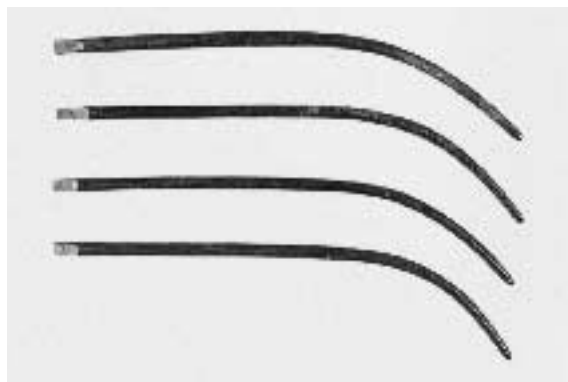
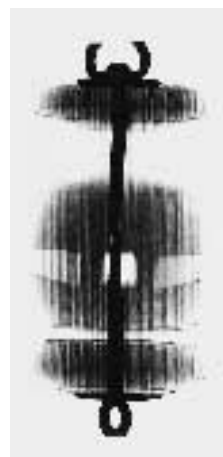
中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其4

[法量] 総高16.3 宗木長12.2 宗木径7.2 架長33.5
天蓋の辺長49

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記] (架柄 墨書)「天/女/四/角(4側面)」_△「天/女/四/角(4側面)」_△「巳(小口)」_△「天/女/四/角(4側面)」_△「巳(小口)」_△「天/女/四/角(4側面)」

天蓋の骨の個別データ



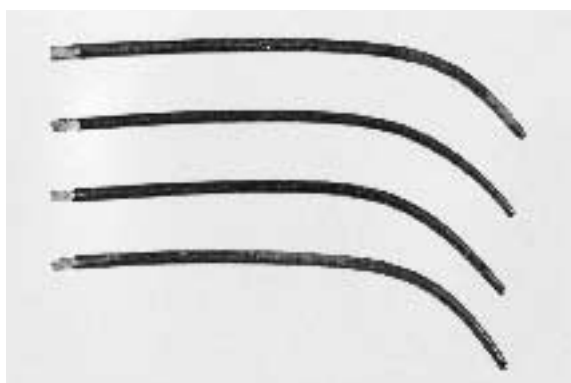
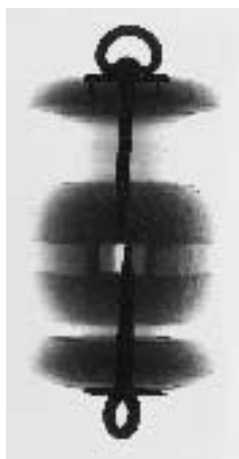
中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其5

[法量] 総高15.9 宗木長11.9 宗木径7.6

架長33.5 天蓋の辺長49

[品質] 櫛製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記](架柄 墨書)「天/女/四/角(4側面)」,「天/女/四/角(4側面)」,「庚(小口)」,「天/女/四/角(4側面)」,「庚(小口)」,「天/女/四/角(4側面)」



中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其6

[法量] 総高16.0 宗木長11.9 宗木径7.6

架長33.5 天蓋の辺長49

[品質] 櫛製、黒漆塗。金具は銅製漆塗。

[銘記](架柄 墨書)「大弁/天女/壇(3側面)」,「大弁/才天/女壇(3側面)」,「大弁/才天/女壇(3側面)」,「辛(小口)」,「大弁/才天/女壇(3側面)」

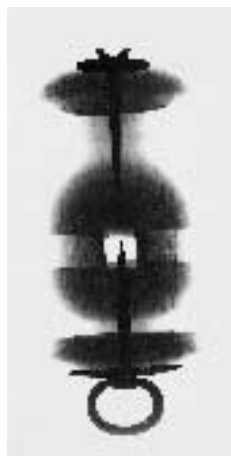
中倉196 灌頂天蓋骨 第9号 其7

[法量] 架長33.5

[品質] 樺製、黒漆塗。

[銘記](架柄 墨書)「大弁 / 才天 / 女壇 (3側面)」
「大弁 / 才天 / 女壇 (3側面)」
「大弁 / 才天 / 女壇 (3側面)」

[備考] 架3本のみ存す。



中倉196 灌頂天蓋骨 第10号

[法量] 総高16.2 宗木長 12.2 宗木径7.0

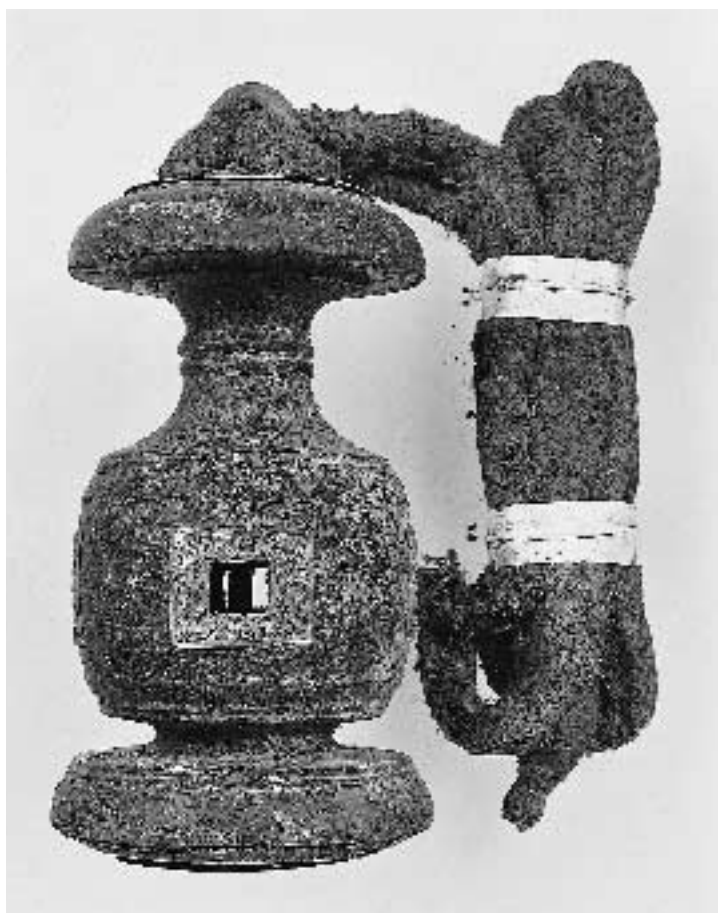
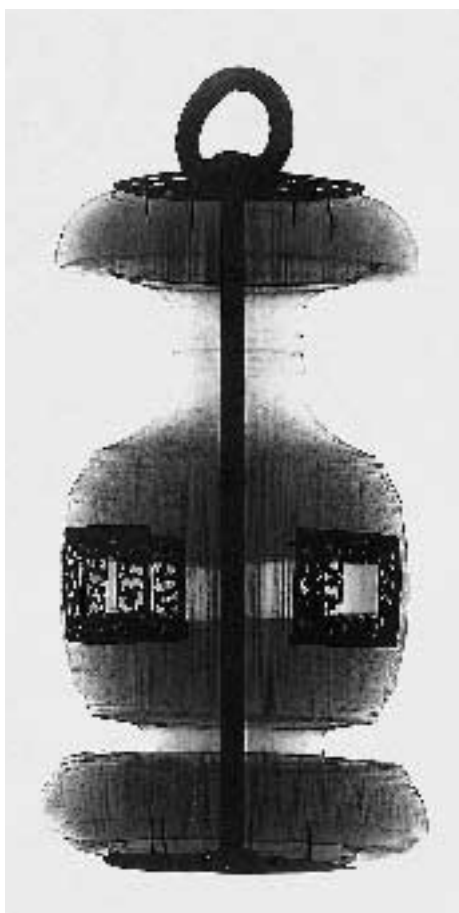
架長36.5 天蓋の辺長53

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。

[銘記](架穴 墨書)「口」「井」「回」。(架のうち3本
墨書)「口」「井」「七」

[備考] 架のうち1本は後補



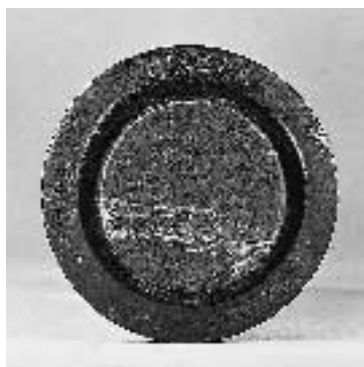
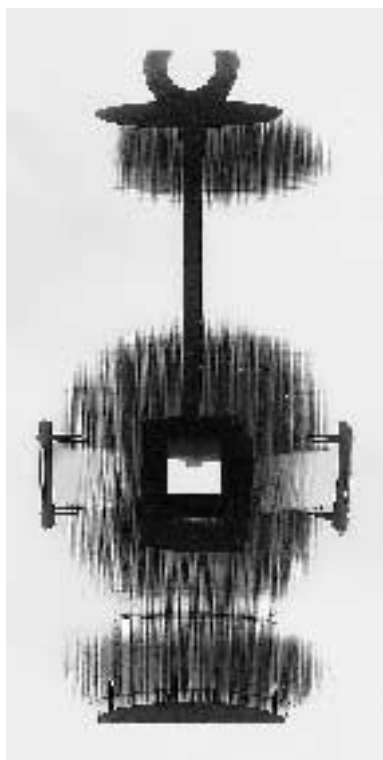


中倉196 天蓋骨 第1号

[法量] 総高30.0 宗木長25.1 宗木径14.6
紐長200

[品質] 木製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。赤絹角打
組紐が付属する。

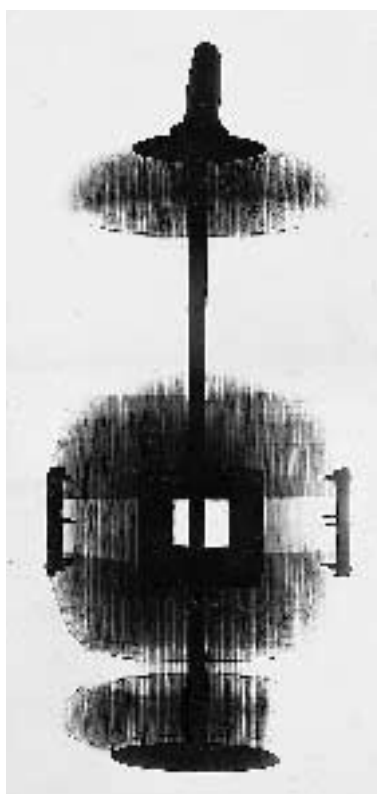
[備考] 右上図は宗木上面の実測図。



中倉196 天蓋骨 第2号

[法量] 総高28.5 宗木長24.4 宗木径12.7

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。



中倉196 天蓋骨 第3号

[法量] 総高29.2 宗木長24.3 宗木径12.5 架長118

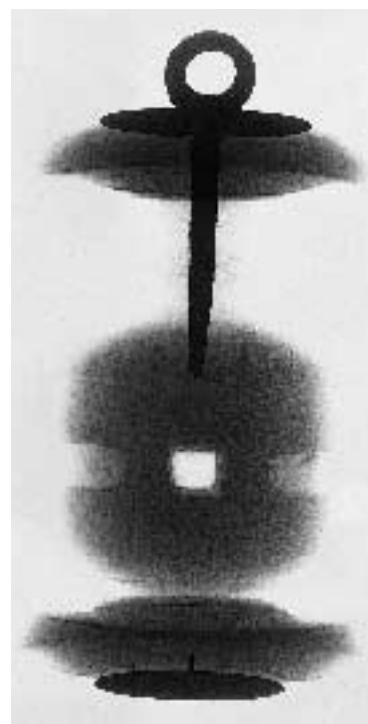
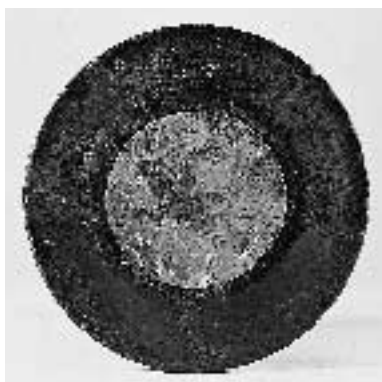
天蓋の辺長170

[品質] 樺製、黒漆塗。金具は銅製鍍銀。

[銘記] (宗木下方の破損部 墨書)「□封□」(架穴 墨書)
「一」「二」「講三」「講四」(架のうち2本 墨書)
「三」「四」



中倉196 天蓋骨 第3号 架



中倉196 天蓋骨 第4号
 [法量] 総高24.1 宗木長20.3 宗木径13.6
 [品質] 櫟製、黒漆塗。金具は銅製鍍金。

造仏所作物帳釈文

挿図3の作物帳断簡の直後に続く灌頂天蓋の關係個所を書き出す。各断簡の接続は福山敏男「奈良時代における興福寺西金堂の造営」、『日本建築史の研究』桑名文星堂 昭和一八年）による。

(鈴位花)	形二百五十六枚各徑三寸	料銅二斤四兩一分	表花形四枚各徑七寸半	料銅一斤十三兩	白鑄四兩三銖
	塗練金小四兩二分	水銀小一斤八兩二分	塗練金小二分	水銀小二兩三分	銅百卅四斤六兩一分
小鋪三百六十八枚各徑三寸 料銅十六斤	塗練金小三兩一分	水銀小一斤二兩三分	各徑二寸莖長五寸	料銅一斤十四兩三分合銀二分	鐵八斤八兩三分
	小鋪三百六十八口各周三寸所用如鋪	料銅六斤九兩一分			鋪六百廿四枚
小鈴三百六十八口各周三寸所用如鋪	合白鑄一兩三分	子鐵三斤十二兩	塗練金小二銖	(奈良国立博物館蔵、 ^[24] 三三・三三)	(続々修35・3、 ^[24] 三四・三五)
塗練金小四兩一分	塗練金小三兩二分	水銀小一斤九兩一分	鎮毛卅八編別長四尺	水銀小一分四銖	鈴六百五十六口
鈴位花形三百六十八枚各徑二寸	塗練金小三兩二分	料銅二斤三兩	用生糸九兩二分編毛料	練糸七兩	緋純三丈
塗練金小三兩二分	鋪鈴等固銅系一百八縷別長三尺	水銀小一斤二兩二分	緋系八兩	緋純三丈	緋系八兩
黃糸六兩鋪固料	小幡頂鳳形八枚各長一尺六寸廣一尺二寸	料銅廿九斤二兩	幢末横木四枚各長九尺六寸徑三寸以槽作塗漆	掃墨一升二合	黃糸六兩
塗練金小八兩二分	幡鎮四箇以緋毛作	水銀小三斤一分三銖	端銅八口各長三寸半徑三寸	料銅五斤六兩一分合銀二兩	練糸七兩
用表銅四口各徑一尺一寸	裏銅四口各徑七寸不塗金	料銅七斤三分	塗練金小一分	水銀小五兩二分	生糸九兩二分
塗練金小三兩	内輪銅四口各徑七寸不塗金	水銀小一斤二分	端環八具各徑二寸莖長六寸	料銅六斤二兩三分合銀二分	漆三升八合
内鈴卅二口各周八寸廿四口各周三寸並塗金漆	鈴合白鑄一分三銖	料銅三斤十兩一分	中銅八口各長四寸口徑三寸半 ^(半)	料銅五斤四兩二分合銀一兩二分	掃墨一升八合
		料銅一斤六兩二分	打立環八口各徑一寸八分莖長五寸	料銅三斤十二兩	馬髮廿八斤
		料銅二斤十一兩	右件灌頂四具料用練金小卅兩二分一銖		楠二枝各長二尺四寸徑七寸蓋宗木料
		鈴子鐵九兩三分	銀四兩三分		(京都国立博物館蔵、『大日本古文書』未収)
			水銀小十四斤四兩三分二銖		

*印の文字はマイクロフィルムで確認したうえで訂正したものである。